平成25年度　学校評価中間評価書

輪島市立松陵中学校　H25．10．1

A+Bが90%以上はa

※判定結果は3段階（a:十分達成　b:ほぼ達成　c:工夫・改善が必要）

評価項目	今年度の重点目標	具体的取組	年度当初の現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	中間結果	備　考	中間評価	成果と課題	後期に向けての対策
①確かな学力の定着・向上を図る	基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図る。	・授業改善 ・習熟度別少人数授業（数・英） ・個別指導 ・放課後学習 ・長期休業中の補習	基礎的な事項について概ね良好な生徒と定着の低い生徒の2極化が見られる。 また、習得した事項を活用して、思考・判断・表現できる生徒は少ない。	（成果指標） 必要な学年相当の基礎学力が身についている。	基本的内容についての正答率が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	3回の平均 1年：C 2年：D 3年：D（4回）	定期テストや市内統一テスト、休業開け学力テスト等の結果を基に判断する。	a b (c)	基礎的・基本的な内容が十分身に付いている生徒と、十分に身に付いていない生徒の差が大きい。現状を改善できていない。	・授業に向かう姿勢をきちんとさせる（授業の約束4箇条）。 ・松陵中授業スタイルをもとに授業づくりをすすめ、意欲をもたせる工夫・授業の流れがわかる板書（プレートを使って）ノート指導を継続して行う。 ・個別指導が必要な生徒には、放課後などに指導する。
	「活用力」（思考力、判断力、表現力）の育成を図る。	・授業改善 ・添削指導		（努力指標） 教師が活用力をつけるための授業を行っている。	「活用力」を育むために意識して「書く活動」を授業に組み込んだか A：よくあてはまる B：あてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	教師アンケート（1学期） A＋B：80%	1・3学期にアンケートを行う。	a (b) c	教師は、意識して書く活動を取り入れている。	・ノートの添削もしっかりと行い、根拠の取り上げ方などの指導も行う。
				（成果指標） 必要な学年相当の活用力が身についている。	活用力を問う問題の正答率が A：70%以上 B：50%以上 C：30%以上 D：30%未満	国 社 数 理 英 1年　ＢＢＢＢＡ 2年　ＢＢＣＣＣ 3年　ＢＤＣＢＢ	定期テストや休業開け学力テスト等の結果を基に判断する。	a (b) c	活用力を問う問題では、正答率が低く、力が十分付いているとはいえない。特に2年生では数学・理科・英語において他の学年より低い。	・授業の中で、適応問題として活用力を問う問題を取り入れる。 ・毎日の課題に活用力を付けるようなものも取り入れて与える。
	家庭学習の習慣化を図る。	・授業に生かす予習課題 ・習熟度に応じた復習課題 ・自学	課題をやってこない生徒が見受けられる。	（成果目標） 家庭学習を毎日やってくる。	（成果目標） 家庭学習をやってくる生徒の割合 A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	学習アンケート（1学期） 1年：A 2年：A 3年：C	○学習時間調査 ○生活アンケート3 「毎日の家庭学習が習慣となって身についていますか」	a (b) c	家庭学習をやってくる生徒は、1・2年生はかなり高いが、課題を提出しない生徒が固定化してきている。提出率の低い生徒は、テストの点数も低い。	・課題を提出しなかった生徒については、徹底した指導を行う。 ・きちんと提出している生徒を評価し、みんなの前でほめる。 ・自学ノートの良いものをコピーして掲示し、紹介することで学習意欲を喚起する。
②健やかでたくましい心身を育成する	道徳教育の充実を図る。	・道徳の時間には道徳の授業 ・体験活動を生かした道徳授業 ・学担以外の授業 ・ゲストテートチャーの活用	意識して道徳の授業を行っているが，生徒が食いつく授業の工夫が必要である。	（努力指標） 他人の気持ちを大切にし、好ましい友人関係をつくることができる。	「他人の気持ちを大切にし、好ましい友人関係をつくることができたか，」 Aよくあてはまる Bあてはまる Cあまりあてはまらない Dあてはまらない	生活アンケート（7月実施）の結果 A　52．9% B　38．5% C　6．9% D　1．7%	生徒調査（生活アンケート）を1・3学期に行う。	a (b) c	生活アンケートの結果は良好で、生徒の意識は高いと言える。しかし、いじめアンケートで「嫌なことを言われる」と訴えた事例が数件あり、行動が伴わない面があると考えられる。	・道徳の時間を中心として様々な機会を捉え、継続的に指導していく。
	挨拶や言葉遣いを適切にできるようにする。	・あいさつ運動 ・生徒会活動による取組 ・授業の終始のあいさつ	自ら進んで快く挨拶をする生徒は増えつつあるが、全員ではなく声が小さい。	（満足度指標） 生徒は自分から進んであいさつをかわしている。	「自分からあいさつをしている」 A：よくあてはまる B：あてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない	学校や地域であいさつ 肯定　否定 1年　90.0%　10.0% 2年　90.2%　9.8% 3年　88.9%　11.1% 合計　89.7%　10.3%	生活意識調査と観察や記述などから総合的に判断する。	a (b) c	あいさつできていると自分で判断している生徒はほぼ90%であることが分かった。しかし、声の大きさや、態度などについて観察してみると、決して十分なものとは言えない。	・玄関や廊下での登校指導の折に、声をかけるなどしながら、今後も指導を續けていく。
③キャリア教育を推進する	自分の将来を考えながら，目標を持って生活できるようにする。	・学級活動・総合における進路学習 ・卒業生の体験談 ・社会人講師による講話	高校卒業後の進路について考えている生徒が少ない。	（成果目標） 高校卒業後の進路について考えている。	高校卒業後の進路について A：考えている B：少し考えている C：あまり考えていない D：考えていない	アンケート結果 A　26% B　39% C　26% D　9%	生徒調査（生活アンケート）を1・3学期に行う。	a (b) c	アンケート結果より65%の生徒は、高校卒業後の進路について考えている。3年生は70%、1年生は56%が考えていると答え、学年が上がるに従って進路に対する意識は高い。しかし、将来の夢や職業が具体的に書ける生徒は、学活の授業や個人面談シートを見ても少ないのが現状である。	・2学期以降に、卒業生の体験談や社会人講師による講話等を行い、将来について考える機会を設けていく。
	好ましい人間関係をつくることができるようにする。	・教育相談体制の充実 ・構成的グループエンカウンターの実施 ・ソーシャル・スキル・トレーニングの実施	人間関係を上手く作れない生徒の割合が比較的高く、不登校の生徒が存在する。	（成果指標） 現在の不登校生徒の改善と新たな不登校の防止を図る。	不登校の状況について A：新たな不登校生徒　0 　かつ不登校改善 B：新たな不登校生徒　0 C：不登校生徒の悪化 D：新たな不登校発生	・4月当初の不登校傾向生徒の状況については、改善した生徒も出てきた。しかし、5月頃から2年生を中心に、登校を渋る生徒が出てきた。9月現在、学校行事に参加するなど改善傾向にはある。		a b (c)	・昨年度からの不登校生徒は2名解消された。あと1名についても、昨年からは改善傾向にある。しかし、家庭や本人の登校意欲が低下している生徒もおり、組織的に対応していきたい。また、これまでの取り組み見直し、新たな不登校生徒の未然防止に努めていく必要がある。	・後期にもQUテストを実施し、2回の結果の比較・分析をもとに、生徒の変容の正確な状況把握を行う。 ・家庭や関係諸機関との連携をいままで以上に強化し、個別対応体制を整えていくとともに、教育相談を定期的に実施し不登校生徒の未然防止に努めていく。
④より良い学習環境づくりを進める	学年単位で，より良い学級づくりを進める。	・Q－Uテストの活用 ・個人目標・学級目標の達成度検証	学校生活に不満を持つ生徒が存在する。	（成果指標） 生徒が、学校生活に満足している。	生徒アンケート及び保護者アンケートで「学校が楽しい」と感じている。 A：「よくあてはまる」と「あてはまる」を合わせて90%以上 B：同様に　80%以上 C：同様に　60%以上 D：60%未満	学校生活が楽しいと思いましたか 肯定　否定 1年　87.8%　12.2% 2年　86.9%　13.1% 3年　84.1%　15.9% 合計　86.1%　13.9%	生徒調査（生活アンケート）を1・3学期に行う。	a (b) c	生徒アンケートの結果からは「学校生活が楽しい」と感じている生徒が80%をこえていることが分かるが、否定的評価をしている生徒が10%以上いることに目を向けていきたい。	・生徒が自ら活躍する場面や、日常生活の中で一人ひとりを認めていくという方針で臨む。
	いじめを見逃さない・許さない学校づくりを進める。	・生徒とのコミュニケーションづくり ・生徒会としての啓発活動 ・発見時の適切な対応	からかいなど言葉によるものや行動面でのいじめが発覚している。	（成果指標） いじめやからかいがない。	いじめアンケートでいじめやからかいを受けたと回答した生徒の解消率が A：100%以上 B：90%以上 C：80%以上　D：80%未満	6月末の調査より 認知数（重なりあり） 6月　被害　加害　見た 1年　6　7　19 2年　1　0　1 3年　0　0　2 合計　7　7　22	いじめアンケート調査を複数回実施する。	a b (c)	いじめを認知した後の対応については個別にできており、加害・被害両生徒及び保護者への連絡等もスムーズに行なわれていた。 いじめが発覚した後の指導により、同一の生徒へのいじめは一旦解消したように見えているが、形を変えて継続しているケースがある。また、加害者は変わっていないがいじめる対象を変えてのいじめも発生している。中には、被害生徒が訴えない事例もあり、いじめやからかいは解消していない。 　いじめを認知した後の対応については個別にできており、加害・被害両生徒及び保護者への連絡等もスムーズに行なわれていた。	・これまでに認知されたいじめの加害生徒・被害生徒への継続的な観察を行なっていく。 ・少しのサインも見逃さないように、学校生活向上チームを活用したり、定期的な情報交換の場を設け、いじめを未然に防ぐ努力をしていく。
	統合に向けて不安を減らす交流活動を進める。	・教育活動の中で実施できる内容 ・部活動交流 ・生徒会交流 ・学校公開・広報	統合に対して不安に思っている生徒がいる。	（満足度指標） 生徒は統合に対して不安に感じていない。	統合に対して不安が A：ない B：少しある C：ある	交流活動で不安が（解消・少し解消）した　**57%** 部活動交流で不安が（解消・少し解消）した **75%** **生徒アンケートより**	生徒アンケートを1、3学期に行う。	a (b) c	統合への不安解消について、部活動交流では、75%が「仲良くなれた」「うまくなれる」などの理由から肯定的な意見だった。また、1年生の合同海岸清掃も57%が、肯定的な意見だった。ただ、部活動交流が行われていない部活動もあり、その中の70%の生徒が「して欲しい」と答えている。また、海岸清掃では活動の多くが学校別で行われ、「話さなかった」「余計不安になった」などの声もあった。	①部活動交流の推進 部活動交流が不安解消に効果があるのは明らかであり、まだ行っていない部活動は、新人戦終了後に計画に実施する。 ②三井中学校生徒との授業交流の工夫 各校で連絡を密にして、より効果的な交流になるように工夫をする。また、生徒の思いをしっかり受けとめる。 ③生徒会の交流 生徒会の交流を通して、新しい学校を一緒に創っていくという心情を育ませるために、生徒の思いを大切にし、自主的な活動が行われるように支援する。 ④広報活動の充実 交流後の感想などを各校で交換する活動を行い、不安の解消に努める。
				（努力目標） 交流活動を計画的に進める。	計画的に A：進めた B：ほぼ進めた C：あまり進めていない D：進めていない	A　33% C　67%	教師アンケートを1，3学期に行う	a b (c)	開校準備委員会で、部活交流や授業への参加、生徒会の交流が計画され、実施できている。	

学校関係者評価委員会の評価

・良いノートの例を掲示してあるのが良い。ノートの取り方の参考になる。
・1学期は挨拶をしない生徒がいたが，2学期に入ると少しずつ減ってきた。声も少しずつ大きくなってきたように思う。
・2回目のQUテストも活用して，人間関係を良い方向に導いていってほしい。
・LINEによるトラブルが発生しているが，生徒への指導も行ってほしい。
・統合に対して不安に思っている生徒や保護者がいる。不安解消に向け取り組みを進めてほしい。

評価結果を踏まえた今後の対策

・生徒には根拠や理由を明確にして考えを書くという意識が少しずつ定着してきた。今後もノート添削を通して考えや意見の書き方を指導していく。
・あいさつに関しては，まだまだ十分でない。生徒会とも連携して学校全体であいさつ運動を進めていく。
・QUテストを活用し，さらに道徳や学活を通して，より良い人間関係づくりを進めていく。
・ネットに潜む危険性について保護者への啓発活動（非行被害防止講座）を実施する。生徒に対しては，全校集会や学活で指導していく。
・授業や部活動，文化祭での交流等で不安の解消を図っていく。